
ソードアート・オンライン～炎の双剣～
リンゴキライ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンラインく炎の双剣く

【作者名】

リンゴキライ

【あらすじ】

西暦2022年、「ソードアート・オンライン」通称SAOと言う最新型のVRMMORPGゲームがリリースされた。

そこに一人のプレイヤー鈴木勝すずきまさるという男がいた。

実は彼これまで誰も到達できなかったとされていた第13層まで唯一辿り着いた男だったのである。

彼はそのままβテスト時代のデータを引き継ぎSAOへ旅立つもちょっとしたゲームの不具合に直面する。

これはそんな彼がSAOの中でとりあえず生き延びようとするお話

です。

SAOの二次小説です!! 始めてでかなり読みにくいと思いますがよろしく願います!

ダメな点などはあれば感想蘭などに指摘してください!

第1話：ログアウトできなくなっちゃったんだが

「????」遂に買えたぜええ!!ベータテストも終わっちゃったが本命のブツが手に入ってラッキーだ!!その名もソードアートオンライン!!いやあく苦勞して並んで手に入れた甲斐があった」

俺の名前は鈴木悟。

遂に念願のSAOを買えて喜ぶただのゲータだ!

一応βテストにも参加してずっと本作を待ってたんだ。

まあ今月の出費がやばいのも事実なんだが……まあ仕方ないな!

自宅に帰った俺はさっそくベッドにダイブしてSAOを起動した。

鈴木「よしっ!!!準備完了!!!行くぜッ!!!リンクスタアアアト!!!」

俺は心をワクワクさせながらそう叫んだ。

ログインしてまず設定画面に辿り着いた。

スズキ「名前か……ここはあえて本名にしとこう……Suzuki(スズキ)……っと」

正直ハンドルネームとかはあんまり好きじゃない。

だけどそれは自分の個人情報を漏れないためにするためであった。

けど俺はあんまり気にしない。このSAOならセキュリティも分厚いだろうし個人情報の管理もちゃんとしてくれるだろう。

スズキ「ん？ベータテスターのデータを引き継ぎますかだって？もちろんYESだ！！」

どうやら前回のβテスターだったデータをこのSAOに持ち込めるっぽい。

俺はすぐに了承したと同時に一気に目の前の世界が変化した。

そして俺はゆっくりと目を開ける。

スズキ「……！！来た来た来たあ！！ここがソードアクトオンラインの世界か！！いやあ〜ワクワクしてきたぜ！！」

βテストの時と大きく変わっておりグラフィックなどもリアルな世界観だ。

俺は楽しみのあまり町中を走り回っていた。

スズキ「よし！さっそくフィールドに行こう！」

第一層はじまりの街をでたフィールドは広大な草原に囲まれており、そこにはモンスターもウジャウジャいた。

イノシシも妙にリアルだし雰囲気があって俺はゾクゾクした。

なんか向うにもフィールド狩りしてるやつらがいたのでちょっと離れたところへ俺は移動した。

スズキ「とりあえず一発目はかるーく……」

俺はいつもの感覚で手持ちのブロンズソードをモンスターへと振ってみた。

気になってステータス画面を開いたところ・・・

スズキ「は？レベル108？」

俺のステータスはなぜかいきなりレベル100超え。

HPとSP・攻撃力と防御力に至っては訳のわからん数値でてるし
・・・ソードスキルもメツチャあるやん・・・
こんなチーターやん・・・

さすがになんかの不具合であると信じたい。

でない俺が最新型RPGのチーターってネットで炎上されて罵られること間違い無しやん。

一度画面を閉じてもう一度確認するも結果は同じだった。

スズキ「まさか初日からこんな苦悩を得るとは・・・とほほ」

とりあえず街へ戻ってブラブラしようかと考えていると遠くから声

あまりのことに口が回らない彼らだったがすぐに話を元に戻し本題へ入った。

聞けばこの黒髪の男も元βテスターらしくもう一人のビギナープレイヤーに戦い方を教えていたのだそうだ。

そこで俺の一撃を見て俺からも協力してくれないかと頼まれたのだった。

スズキ「まあ俺でよければ。とりあえず自己紹介しようぜ！これからもしかしたらまた会うかもしれないしな」

キリト「そうだな。俺はキリト。そしてこっちが」

クライン「クラインだ！よろしくな兄ちゃん！」

スズキ「ああ！俺はスズキ！よろしくなキリト、クライン！」

そこから俺はクラインへソードスキルの基礎とゲームの情報をキリトと説明した。

このゲームは第100層まであるらしく各層ごとに街や迷宮区ダンジョンが存在する。

アイテムなども複数あり、剣などの装備品はもちろん回復アイテムや攻撃アイテム、そして蘇生アイテムなども存在する。

典型的なRPGの仕様に基づいたゲームである。

キリト「スズキこのゲームにやけに詳しいな。βテストの時何層まで行けたんだ？」

スズキ「テスト期間終了までのダンジョンとボスは全部倒したぜ。
まあもう少し欲しかったんだがβテストだし仕方ねえか！」

キリト「は！？ぜ・・・全部！？ということは13層まですべて！？」

なぜかキリトは驚いていた。

クライン「なんだ？13層ってそんなにやばいのか？」

キリト「やばいなんてもんじゃない・・・βテスト時代誰も到達で
きないとされていた13層まで攻略するなんて・・・！パーティー
は？一体何人で挑んだんだ？」

スズキ「ソロ」

キリトクライン「!？」（。皿。）

スズキ「な・・・なんだよ!! どうせ俺はパーティーもロクに組めな
いただのゲーオタですよッ！」

キリト「いや・・・ちがう・・・ああ! もう訳がわからなすぎ
る！」

クライン「俺にはよくわからんがスズキがとんでもなく強い奴って
のはわかったぜ・・・」

キリト「どれだけβテストの中にいたんだよ・・・」

ちなみに俺はβテスト中はほぼ毎日15時間くらいやってたぜ☆
腹が減ったら飯食ってまた入っての繰り返しだったからあれ? おれ
いつ寝た? って感覚は日常茶飯事だった。

不健康とはまさに俺にピッタリな言葉だろう!

キリトは色々頭を悩ませたのもつかの間、少し冷え切った所で再び
狩りを再開した。

そこでほぼ夕方へと差し掛かりクラインも宅配のピザを頼んでいた
のでひとまず解散することとなった。

連絡も交換し合ったことで俺は街へと帰ろうとした。

クライン「あれ？ログアウトボタンがねえ……」

背後からそんな声が聞こえたので俺は振り帰った。

キリトと俺も確認するがそこに本来あるはずのログアウトボタンがなかった。

クライン「まあ今日は正式サービスの初日だ。バグの一つや二つがあって当然なのかもな！」

クラインはそう言うが、最新のゲームを何年もプレイしてきた俺は違和感を覚えた。

それはアナウンスやサーバーのダウンが行われていないということだ。

俺たちはたまたま気づいたがもっと早くログアウトボタンがないと気づいたプレイヤーもいただろう。

それなのに運営は何もしていない。
嫌な予感がした。

スズキキリトクライン「!？」

俺たち3人は突然はじまりの街の広場に集められていた。

スズキ「スゲエな・・・全プレイヤーいるんじゃないね？何かのイベントとか始まるのか？ホラ。レイド的な」

キリト「いや。イベントだとしてもこんなにプレイヤーが集められるのはおかしな話だ。そもそも俺達は今強制的にレポートさせられた」

キリトは冷静にそう返してきた。

すると頭上に謎の文字が点滅していた。

WARNINGガバアアアアアアアアアア

その文字は空全体へと広がり、そこから謎のローブをまとった何か^が現れた。

GM「プレイヤーの諸君。私の世界へようこそ。私の名前は茅場明彦。今やこの世界をコントロールすることの出来る唯一の人間だ」

マジかよ。このゲームの製作者さん直々の登場だぜ・・・

そこから俺らはとんでもないことを聞かされた。

ここにいる全プレイヤーはログアウトができない。それは不具合などではなく仕様だと意味のわからないことを言ってきた。

しかもここで死んだら現実世界でも命を落とすのそれで、強制的に外部から外そうとしたりすると本体のナーヴギアが信号とかで俺たちの脳を破壊するんだとか……オーマイガー……俺たちが唯一解放される条件は一つ。

このゲームをクリアすることだ。それも第100層までの攻略。

スズキ（無理ゲーやん……）

GM「では最後に私から諸君らへ一つプレゼント与えよう。メールボックスを見るといい」

GMがそうつぶやくと俺のメールボックスへ一つのアイテムが送付されていた。

そこには普通の手鏡が握られていた。

するとその鏡は一斉に発光した。

スズキ「眩しッ!!」

鏡には相変わらず俺の顔が映るだけ。

スズキ「なんだこれ？ビックリアイテムかなんかか？」

俺とクラインは勢いよくキリトに路地裏へと連れていかれた。

キリトは俺たち2人にこの世界で生き残るために様々な攻略法などを教えるそうだ。

だから俺についてきて欲しいと。

しかしクラインは仲間達と合流すべく街へと戻っていった。

キリト「スズキは俺について来てくれ……というかマジで付いて来て下さい」

スズキ「え？なんで急に敬語？」

キリト「今おそらくこの世界のプレイヤーの中で一番強いのはスズキだ」

スズキ「え？だけどあれはただのバグで……」

俺はもう一度ステータス画面を開いた。

キリト「やっぱり……それがスズキの正常なステータスなんだ

よ……」

スズキ「マジんですか……」

やはりそこにはレベル108のステータスが表示されたままだった。なんならソードスキルが全部強化されていた。なんで？

キリト「うん。ということで付いて来て下さい。マジでお願いします」

スズキ「なんかキャラ変わってね？まあ全然いいぜ。どうせ行くアテもないし」

そう言うとキリトは大きくガッツポーズを取った。

キリト「これからよろしくなスズキ！そうと決まればさっそく次の村へと向かおう」

スズキ「おうよ」

てことで早速俺たちは街を出て次の村へと向かった。

途中でオオカミのモンスターに遭遇するも・・・

キリト「ハアアアアアアアアアアアア」

キリトは気合十分にソードスキルを放った。

キリト「！スズキ！囲まれてるぞ！」

オオカミ×10『グルルルルルルルルルルル』

このゲームで死んだら本当に死ぬ・・・こんなオオカミでもHPがゼロになったら・・・
心とそんな事が頭によぎる。

スズキ「・・・ハハッ」

しかし俺は笑っていた

同時に俺は腰につけていた真っ赤な二本の刃を握った。

キリト（！？あれは・・・双剣！？）

スズキ「ソードスキル！！インフェルノフレア！！！」

ズババババババババババババ

オオカミ×20 『グラアアアアアアアアアア！？』

二本の双剣から放たれる灼熱の炎は辺り一体のオオカミを一気にポ
リゴンへと変えて行った。

スズキ「うっし！行こうぜキリト！」

タッタッタッ

キリト「(。o。)

時は少し前

GM「フウ……さて。一演説を終えたところで一旦休憩に……？　そういえば数名のプレイヤーのソードスキルの不具合がまだ修正されていないかったな」

カタカタカタカタ エンターッ

GM「危ない危ない。エラーやバグが報告されたりでもしたら大変だからな……。とりあえず人休憩挟んだら私のアバターも作るでしょう」

この時GMこと茅場明彦は気づいていなかった。

この世界ですでに一人だけ不具合急の強さを持つプレイヤーがいると言う事。

そしてそのプレイヤーのソードスキルの強さを元に戻してしまったことを……

彼は後にこの行いを後悔する事となる……

第2話：仲間、そして

あれから一ヶ月が経過しようとしていた。

俺とスズキはいつものようにフィールドのモンスターを狩っていた。

スズキ「ブレイズスラッシュ」

モンスター×9「ホワアオアアアアアアア！？」

パリリリリリリリン

相変わらず強過ぎるスズギのソードスキルは大量のモブモンスターを蹂躪した。

ビギナープレイヤー「助けて下さりありがとうございます！」

スズキ「いいっていいって♪お互い助け合ってなんぼのもんだ！」

そしていつものように右も左も知らないビギナープレイヤーをモンスターから助ける。

ビギナープレイヤー「そんな…何かお礼でも…」

スズキ「礼ならその黒髪に言っとけ。アンタを見つけたのはアイツだからよッ♪」

キリト「ええっ！？俺！？」

そしていつものように俺に振り回す。

毎回疲れるよ・・・

スズキ「サンキューキリト♪お前の素敵スキルのお陰で上手く見つ
けられたぜ♪」

キリト「別に・・・俺は何もしてないさ」

スズキ「ったく・・・これだから謙虚なイケメンってのは・・・」

そうか？

俺が言うのもなんだがスズキの顔はかなり整って方だと思うのだが

・・・

なんて口にするともた色々言われるのも面倒くさいし黙っておこう。

キリト「さっきの人から聞いたんだが、今日は第一層の攻略会議が
あるそうだ」

スズギ「随分長引いちゃったな・・・もうそろそろ一月经つし・・・

よし、俺達も行くとしよう」

俺たちは訳あってこれまで攻略に手を加えなかった。

それはさっきのようなビギナープレイヤーを助けるため。

同時に見返りとして情報を得るためでもあった。

まあ情報共有は毎回俺の仕事なんだが・・・

「いつもありがとよ！キリト」

お陰で約2000人まで上り詰めると思われた死者数も約400名
まで抑えられた。

これらはほとんど俺とスズキで行ったことだ。

しかしそれでも俺たち2人だけじゃすべてを助けるのは不可能だ。俺たちがこうしている間にもこのデスゲームの恐怖に怯える人達だっている。

そこでスズキと俺は第一層攻略会議に参加しコミュニティを作り上げるべく第一層へと向かった。

茅場「フム・・・想像以上にプレイヤー達は慎重に動いている。いくらβテスター達が情報を共有しているとは言えここまで抑えられるものなのか・・・実に面白い」

男茅場晶彦は想定外の事態にも関わらず微笑んでいた。

茅場「どれ。私もそろそろ一人のプレイヤーとして動くでしょう。この一ヶ月データの管理で退屈していたからな。アバター名は・・・私の名前から組み取ってヒースクリフってのはどうだろうか？」ドヤァ

第一層：トールバーナに

スズキ「ここが・・・」

キリト「ああ。やはり攻略会議なだけあって人も多いな」

ここトールバーナの周辺には多くのプレイヤー達が集まっていた。
全員攻略会議参加する奴らだろう。

????「お！なんや！そこにおるのはスズキはんやないか？」

スズキ「キバオウのおっさんか！お久しぶりだな！」

キバオウ「生きとったんか：まあアンタらの実力やったら余裕やろ
うなッ！ガハハハ！」

このキバオウさんって関西人は数実前のクエストで世話になった仲
だ。

最初は俺達が元βテスターだからってあまり良い印象を与えなかつ
たが

キバオウ「キリ坊も一緒やったんか！お互い頑張ろうやッ！」

キリト「はい。今回もよろしく願います。キバオウさん」

クエスト攻略を期にこうして仲良くしてもらってる。

スズキ「またよろしくな！キバオウのおっさん！」

数日前

ワシはキバオウ。

このクソみたいなデスゲームに巻き込まれたナニワのおっさんや。
ワシはあのGMが去ったあとすぐに仲間たちと合流して先陣切った
ろうと思った。

せやけど・・・

キバオウの仲間1「グワアアアア！」

キバオウ「！待っとけ！いま助け」

キバオウの仲間1「ぐっ・・・キバオウさん！ワイのことはいいん
で早く逃げて下さい！」

キバオウ「アホが！何をぬかしとんねん！こんな奴らワシが一気に

・・・」

大量のモンスター『グオオオオオオオオオオ』

キバオウの仲間2「キバオウさん！もうアカン！早く逃げましょう！」

キバオウ「クソっ！クソクソッ！」

ワシらは仲間を一人見殺しにしてしまうた。

キバオウ（なんでこんな事になったんや・・・ハッ！）

そこでワシは一つ考えた。

βテスターや。アイツらがあの広場で事前に情報をくれとったら

．．
そこからワシの中でβテスターの奴らに対する恨みが生まれた。

そこからワシはβテスター達に対する想いでいっぱいになってもうた。

あの人と出会うまでは．．．

キバオウ「あんたらが今回ワシらのクエストに協力してくれよるってヤツか？」

スズキ「おう！俺はスズキ！よろしくな！オッサン！」

なんやこのアホそうなガキは・・・？

ワシそもそも年上やで？せめて敬語くらい付けーや！

キリト「キリトです・・・よ・・・よろしくお願いします」

それに隣の若い兄ちゃんも頼りなさ過ぎる・・・
ホンマにこの二人と組んで良かったんか？
そんな不安を抱えながらも俺達は目的のクエストへ向かった。

大型モブモンスター『ブモオオオオオオッ』
モブモンスター×20『モオオオオオオ』

キバオウ「ワシらのはあの奥のデカイやつをぶっ叩く！お前さんたちは周りの雑魚を頼むわ！」

キリト「無茶だ！一人で突っ込んだら・・・」

キバオウ「ワシの言う通りにせんかボケェ！」

キリト「待て！」

黒髪の坊主の警告を無視して、ワシは奥のデカイモンスターへ向かった。

ここまでどれだけ鍛えてきたか自分も十分に理解していた。
せやけど・・・

大型モブモンスター『ブモオオオオオオッ！』

キバオウ「どわああああ！」

それはただの過信やったんや・・・

そりゃそうや。実際こんなデカイ奴となんか戦った事ないんやから

・・・

大型モブモンスター『ブモオオドオオツ！』
キバオウ仲間2「キバオウさああああん！」

ワシの目の前までデカいのが突っ込んでくる．．．

キバオウ（アカン．．．もう無理や．．．）

死を覚悟した．．．

「バーニングクロス」

ワシの目の前に一人の男が立っていた。

訳の分からん二本の剣を持ったそいつは目の前のデカブツを一撃で倒しおった。

キバオウ「あ．．．アンタは．．．」

スズキ「大丈夫っすか？キバオウのおっさん」

ワシはその時初めてスズギはんに助けられたんや。

キバオウ仲間2「凄いでキバオウさん！この二人周りの雑魚を一瞬で倒しよった！」

は？はじめは何の冗談やかと思って辺りを見渡したらそれまでおった大量のモンスターはもうおらんかった。そこで素直に礼を言っとけばいいものの

キバオウ「あんたら・・・何が目的や！」

キバオウ仲間2「え？キバオウ・・・さん？」

キバオウ「あんな強いモンスターを一撃で倒せるってことはあんたら・・・さては元βテスターやろ！」

せやけどあの時のワシはアホやった。

スズキ「はい。そうっすけど」

キバオウ「なっ！？か・・・隠す気もないってことか！？」

スズキ「別に隠す必要なくないっすか？」

キバオウ「！．．．．．あんたらの．．．．．あんたらのせいでワシは大事な仲間をなくしたんやぞ！？」

スズキ「！」

キリト「！」

キバオウ仲間2 「キ．．．キバオウさん．．．せやけど．．．」
キバオウ「なんでヤッ！？コイツらがああ演説の後に広場の連中達に情報提供しとったら仲間1は死なんかったんやぞ！？」

ワシやって気づいっとったんや．．．

悪いのはコイツらやない。あの時ワシが勝手に突っ走ったから．．

せやけど認めたくなかったんや．．．
自分のせいで仲間が死んだって事を．．．
せやのに

スズキ「すみませんでした」

キバオウ「！？」

キリト「！スズキ！何を！？」

スズキはんはなんとワシに頭を下げおった。

スズキ「アンタの言う通りだキバオウのおっさん。俺達は元βテストターにも関わらずあの日平場をすぐに立ち去った。本当ならあの時事前に攻略情報を与えたはずだったのに．．．」
キリト「．．．．．」

違う・・・

ワシはこんな・・・

スズキ「だから・・・俺達はこれまで救えなかった分の奴らを助けたい。その気持ちは元βテスターであろうと同じなんだ！信じてくれ」

その時の言葉、そしてスズキはんの揺るぎない目を見てワシは初めて気づいた。

この人は・・・いや。元βテスターの連中も関係ない。全部がワシが悪いんやって。

キバオウ「・・・すまん。ちょっと気持ちの整理がつくまで放っていてくれんか？」

キリト「・・・わかりました。スズキ。行こう」

スズキ「・・・ああ。」

そこでひとまずワシらとスズキはんらは分かれた。

キバオウ仲間2「キバオウさん・・・」

キバオウ「ワシは何をやったんや・・・こんなことしても何も意味ない・・・こんなんアイツが報われはさないっっちゃうのに・・・」

キバオウ仲間2「・・・」

キバオウ「なあ仲間2・・・ワシはこれからどうすればいいんや？」

キバオウ仲間2「・・・とりあえず謝りましょう。あの二人

に」

次の日ワシはスズキはんとキリ坊の所へ謝りに行った。

キバオウ「ホンマにすまんかった・・・勝手に怒鳴ったり勝手なことを言って・・・」

スズキ「いや。アンタの言ったことは間違っていない。俺達本来やるべきことを怠った」

キリト「俺も色々すみませんでした。元ベータテスターだったにも関わらず・・・」

キバオウ「いや。ええんや。二人は間違っていない。酒場の店主から聞いたで。アンタらなんやる？ここ最近のビギナープレイヤーを助けよる連中ってのは」

キリト「頭を上げてください。俺たちは当然のことをしたまでです」

この二人はちゃんと動いてくれてたんや。

きっとこの二人がおらんかったら今頃もっと死者も出とったろうに

・・・

キリト「とにかくクエストで誰も死ななかったのは良かったです。

これからはお互い頼り合いましょう」

スズキ「そうだな。ってなわけでこれからもよろしくな！キバオウのおっさん！」

キバオウ「あんたら・・・ワシを許してくれるんか？あんなこと散々言っけしもうたのに」

スズキ「いいっすよ別に・・・失ってしまった奴らはもう戻ってこない・・・だったらここでメソメソしているより前に進んだほうが良くないっすか？俺はそう思います」

スズキはんのその言葉で行き場を失ったワシの決意がようやく固まった。

キバオウ「ホンマにおおきにや。改めてキバオウや！よろしくなスズキはん！キリ坊！」

スズキ「おう！頑張ろうぜ！キバオウのおっさん！」

キバオウ「誰がおっさんやッ！」

キリト（キ・・・キリ坊・・・？）

いつかスズキはんに恩を返さなあかな・・・
けどあの人はメッチャ強い。

あの人をいつか助けられるようワシももっと強うならなあかな

・・・

キバオウ「ハハッ・・・」

キバオウ仲間？「？どうしたんや？キバオウさん？」

キバオウ「いや、なんもない。ワシらもそろそろ会議場に行こうか！」

第3話：チーターどころやない

俺とキリトは攻略会議に参加すべく会議場へと向かった。

広場の中央には今回の攻略会議を牛耳るリーダーらしき人が立っていた。

ディアベル「俺はディアベル。気持ち的には・・・ナイトやってみす！」

フランクな喋りで場をなごませた後彼は攻略について解説した。

ディアベル「俺たちでみんなを開放するんだ！」

ワァァアオァァァァ！パチパチ！イイゾ！

彼の見事な演説でこの場にいるすべてのプレイヤーを一つにまとめ上げた。

彼のリーダーシップには惹きつけられる凄みがあると俺は感じていた。

ディアベル「それじゃ、まずは5人くらいでパーティを組んでみてくれ」

キリト「どうする？スズキ。俺達の他に誰か誘うか？」

スズキ「そうだな。とりあえず一度キバオウさんのところへ行ってみるわ」

そして俺はキバオウさんに交渉をしに、キリトは周りに誰かあぶれた人を誘うということにした。

キバオウ「大歓迎や！ちょうどうちもあと2〜3人足りてなかったところやったねん」

スズキ「マジンですか！？助かります！」

キバオウ仲間2「またよろしゅうな！スズキさん！」

スズキ「おう！ならちよっとキリトを呼んできて・・・うん？」

キリトの方に目をやると一人の少女に話しかけている姿があった。

キバオウ「キリ坊もなかなかやりよるのう」ニヤニヤ

スズキ「いや〜若いっていいですなー♪」ニヤニヤ

キバオウ「あんさんもそない歳変わらんやろ・・・」

上手く交渉が出来たのかキリトはその少女を連れてこちらへ向かってきた。

キリト「この子はアスナ。よろしくお願いします。キバオウさん」

アスナ「・・・アスナです・・・よろしくお願いします」

スズキ「おう！俺はスズキ！よろしくな！アスナ！」

キバオウ「ワシはキバオウっちゅうもんや！よろしゅうな！アスナの嬢ちゃん！」

手なわけで俺、キリト、アスナ、キバオウのおっさん、キバオウさんの仲間2の5人でパーティを組むことにした。

キバオウ「ほんなら今日はここで解散と行こうか！明日お互い頑張ろうや！」

スズキ「おう！」

ある程度自己紹介も終えたところで俺達とキバオウのおっさん達は別行動となった。

キバオウのおっさんは何やらさっきのディアベルさんと親しげに話していた。

そこでふとキリトとアスナの方へ目をやると二人はいい感じな雰囲気だった。

アスナ「あ……ありがとう」

キリト「お礼なんていいさ」

はい、俺は邪魔ですね♪

退散退散♪

???「ん？その兄ちゃんあぶれちまったか？良かったら俺達と飲まないか？」

高身長の肌黒マッチョのおっさんが俺に話しかけてきた。

エギル「紹介が遅れた。俺はエギルだ。明日はよろしくな！」

スズキ「おう！俺はスズキ！よろしくなエギルのおっさん！」

エギル「ハッハッハッ！元気いいな！ところでアンタはどのパーティに所属したんだ？」

スズキ「パーティはあそこにいる関西人のキバオウさんって人と隣の人。あとあそこでイチャイチャしている二人だ」

エギル「Ow・・・なかなか濃いメンツだな・・・それより酒はど
うだ？今なら俺が一杯おごるぜ？」

スズキ「誘いはありがたいんだが、あいにくまだ成人してないガキ
なんでね。酒は飲めん」

エギル「え？そうなのか？てっきり20代後半くらいかと・・・」
スズキ「うぐっ・・・！」グサッ

マジか・・・俺ってそんなに老けて見える？

今の一言でHPが半分くらいまで削られた感じがしたぜ・・・

エギル「ま！このゲームの中じゃ法律なんて関係ねえ！」

スズキ「まあ確かに。ならこのシャンパンを一つ」

俺は人生で初めての酒をたしなみながらエギルのおっさん達と話を
した。

そして夜が明け次の日

スズキ「キリトよ〜」ニヤニヤ

キリト「！？な・・・なんだよスズキ・・・そのニヤついた顔は・・・

「．．」
スズキ「アスナとはどこまで行ったんだ？」

キリト「は．．．はぁ！？」

キバオウ「なんやてッ！？キリ坊．．．お前さんその歳でまさか

．．．」

キリト「してないしてない！な．．．なァアスナ！」

アスナ「．．．貴方が焦ってるから変な誤解されているじゃない．

．．．！」

キリト「そ．．．そうだよな．．．落ち着け俺．．．」

他愛もない話もしつつ俺達は攻略の手順をおさらいした。

キバオウ「ワシらはまず後衛で準備しとく。後衛における間は周りの雑魚モブを倒しまくるんや。前衛がある程度ボスのHPを減らしたらリーダーであるディアベルはんが指示を出す。そこでワシらの出番や」

キリト「なるほど．．．後衛と前衛に分けることで無駄な犠牲者を増やすことなく攻撃を仕掛けられるってことですね」

キバオウ仲間2「そーいやぁ、お二人は元βテスターなんですよね？ボスの情報ってどれくらい知ってるんすか？」

キリト「無料配布していた資料通りさ。ボスの名前はイルファング．ザ．コボルトロード。大きな斧を持ったボスでHPゲージがある程度切れると武器をタルワールに変えて攻撃パターンを変化させる」
スズキ「序盤にしては結構強かったな。アイツ」

キリト「だから装備を切り替える瞬間に高火力の攻撃を仕掛けるんだ」

キバオウ「ほえ。ちゃんと研究しとるんやなく」

スズキ「作戦は分かったがアスナはどうする？彼女はまだ始めて間もないだろう？俺達は元ベータスターなうえキバオウのおっさん達もそれなりに場数を踏んできている。彼女をどう守るかが問題じゃないか？」

キリト「あ。それに関しては大丈夫だ。彼女は高スピードの細剣を自在に操る熟練プレイヤーだ。多分キバオウさんより強い」

キバオウ「な．．なんやてッ!？」

キリト「昨日あの夜試しに模擬戦をやってみたんだ。甘く見ていた俺はすぐに一本取られてしまった．．．」

アスナ「えっへん」ドヤア

アスナさん？メチャドヤ顔してますが．．．
まあけどあのキリトから一本取ったんなら戦力として凄く頼りになる。

スズキ「細剣ほどのスピードならキリトとキバオウさんの片手直剣との相性もいいかもな。スイッチの時の被害を最小限で抑えられるし」

キリト「確かに。ならアスナは俺かキバオウさんでスイッチをしよう」

アスナ「あのごめんなさい。その．．．スイッチって何？」

オーマイガー。アスナはスイッチを知らなかったようだ。

てことはこれまで全部ソロでやってきたのか？

キリトは丁寧にスイッチについて説明した。

アスナ「なるほど・・・わかったわ」

キバオウ「そういえば今更なんやけどスズキはんの武器それなんなん？」

キバオウ仲間2「確かに。二本武器持ちなんて見たことないです」

キバオウのおっさん達の問いかけに俺は答えた。

スズキ「ああ。この双剣はベータテスター時代にだけ存在してた武器スタイルらしい。本作では消されたはずなんだが・・・」

キバオウ「は？消された？どういうことや？」

キリト「俺も最初は疑問を抱いてました。多分データを引き継いだ際のバグか何かでこうなったのかと。でも一ヶ月経った今でも消されてなくて・・・」

アスナ「要するに存在しないはずだった武器ってことね・・・」

キリト「ああ。俺もベータテスター時代に少し使っていたんだが扱いが難しくて辞めた。だがスズキは完全に使いこなしている」

キバオウ仲間2「ええ・・・なんで扱いの難しい武器をずっと使おうと思ったんすか？」

スズキ「だって双剣って攻撃も防御もやりやすいだろう？確かに扱いに時間は掛かったがソードスキルの組み合わせも多様だし攻撃も変幻自在だから使いやすいと思うぜ？」

キバオウ「・・・」

アスナ「す・・・凄いわね」

キリト「凄いのはそれだけじゃない。スズキは……」
ディアベル「よし！迷宮区に着いた！いこう！みんな！」

おっと。話しこんでいるうちに目的地についちゃまった。

ディアベル「俺から言えることはただ一つ！勝とうぜ！」

ウオオオオオオオオオオオ

ディアベルの掛け声と共に全員が叫んだ。
そしていよいよ第一層の扉を開けた。

雑魚モブ×20『ブモオオオオオオオオオ』

ディアベル率いる前衛はボスであるコボルトロードへと総攻撃をかけていた。

エギル「でやあああああッ！」

キバオウ「せいやあッ」

キリト「はああッ」

アスナ「せいッ」

次々と雑魚モブを殲滅していく。

俺もいっちょやりますか♪

少し試したいソードスキルもあるし。

雑魚モブ×10くらい『ブモオオオオオオオ』

アスナ「!マズイわ!スズキ君が囲まれてる!」
キバオウ仲間2「あの人なんで毎回モンスターに囲まれるんや?」
キバオウ「言っとる場合かッ!待ってるスズキはん!ワシが助け
」

スズキ「ッジ・イグニッション!!」

雑魚モンスター達『フアアアアアアアアアアア!?!』

試してみた新ソードスキルの威力は想像以上だった。
周辺モンスターは俺が振った双剣の炎によって一気にポリゴンと化
した。

キバオウ「(・・;)」

アスナ「(w(。(。(。(。(w」

エギル「(。(。(。(;)」

後衛の人達「(。(。(。(。」

みんなが驚くのも無理もない。

俺の一撃は周辺のみならずそこにいたすべてのモブを倒してしまっ
たのだから。

ディアベル「よし!後衛部隊!出陣・・・ってあれ?雑魚モンス
ターは!?!」

スズキ「全部倒した」

ディアベル「ふあ!?」w (。o。)(w

「ぎやあああああああああ」

ディアベル「!?マズい!」

一人のプレイヤーが動けず立ちすくんでいた。
そこへボスが攻撃をしようとする。

ボス『ゴオオオオオオオオ』

キリト「!?ベータと違うッ!」

ボスは何故かタルワールではなく大きな刀を持っていたのだ。
そしてその刀を動けずにいるプレイヤーに振りかざそうとする。
キリトとディアベルはそれを助けようとするも・・・

ディアベル（駄目だ・・・!）

キリト（間に合わない・・・!）

動けないプレイヤー「うわああああおあおあッ」

誰もがおしまいだと絶望した。

ガキ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ン

動けないプレイヤー「え？」

しかしその絶望は一人のプレイヤーによって碎かれる。

スズキ「ぐおおおおおおお！」

キリト「ス……スズキ……」

スズキ「今だ！キリト！アスナ！行け！」

キリトアスナ「了解！」

ボスの刀ソードスキルの攻撃を双剣で防いだ俺はボスのソードスキル発動後の硬直状態を狙うべくキリトとアスナに後を託した。

βテスト時代と違っていると一瞬戸惑いはしたがそれが何だってんだ。

助けられる命は助ける。俺はそう決めたんだ！

スズキ「うおおおおおッ！！」

カキイイイイン

コボルトロード『ブオオオオオオオオ！？』

ボスの攻撃を弾き、硬直状態のところへキリトとアスナが攻撃を仕掛ける。

アスナ「スイッチ！」

キリト「ああ！！バーチカルスクエア！！」

ボス『ブモオオオオオオ！？』

パリイイイイン

そこからは圧倒的だった。

アスナと上手く連携したキリトは最後に自身のソードスキルでボスを倒した。

ボスを倒したと同時にクリア後のドロップアイテムを見つけた。

エギル「コングラチュレーション！おめでとう！その景品はあんたらのもんだ！」

キリト「ありがとうエギル・・・ならこれはアスナに」

アスナ「ううん、これはキリト君が受け取って」

キリト「え？いいのか？」

アスナ「うん。だって最後に倒したのはキリト君でしょ？それにこのコートの色・・・キリト君にピッタリだし」ニコッ

キリト「あ・・・ああ・・・ありがとう」／／

ハイ来ました。二人のイチャイチャタイム☆

フード被ってて分からなかったけどアスナってメッチャ美人さんやん。

あんな笑顔見せられたら誰でも惚れちまうやる・・・

キリトは真っ黒なコート『コートオブミッドナイト』を身に着けた。マジでメッチャ格好ええな♪

エギル「ハハッ見せつけてくれるぜ」ヤレヤレ

キバオウ「くう・・・最後美味しいところ持っていかれたで！」

スズキ「何言ってるんすか。キバオウさん達のサポートがあったからこそ犠牲は出なかったんですよ」

キバオウ「まあ大体の雑魚はスズキはんが一掃してくれたしな。てゆーかなんやあのソードスキルは。無茶苦茶な強さやで？」

エギル「なんというか・・・チート級の強さだなアンタ。最後のボスのソードスキルも何事もなく受け止めやがったし」

キバオウ「チートどころやない・・・まさに強くてニューゲームってところやな！ガッハッハッ！」

ということで色々あったものの犠牲者を出さずに第一層を攻略できた。

俺達が解散したあと攻略メンバー全員で宴を挙げた。
俺が一人で飲んでいた時だった。

ディアベル「スズキ君。本当にありがとう」
スズキ「ディアベル!？」

なんと彼は俺に頭を下げてきた。

ディアベル「あの時一番近くにいたにも関わらずピンチだった仲間を見捨てるどころだった。君が駆けつけてくれなかったらと思うと・・・だから本当に感謝している」

スズキ「頭を上げてくれよ。助け合うのはお互い様でだし♪」
ディアベル「・・・君に隠し事はできないね・・・すべて話すよ」

それからなんかディアベルは色々と話してくれた。

自分が元βテスターであること。

そして最後のボス戦のラストアタックボーナスを一人占めしようとして、これまで各店舗の武器を買い占めていたこと。

ディアベル「僕は君達に許されないことをしたんだ。だからこそ君が僕を裁いてくれ」

スズキ「いやなんでそうなる？」

ディアベル「え？」

スズキ「確かに嘘はついてきただろうけどよお、それはみんなを助けるためなんだろう？」

ディアベル「確かにそうだが・・・」

スズキ「だったらそれでよくね？ディアベルが責任を感じる必要は
なくないか？！だって誰も死んでないんだし」

ディアベル「結果的にそうなったがもしあの時君がいなければ・・・」

スズキ「だとしてもだ。俺はディアベルを責めやしない。だって仲間を助けようとした奴のどこが悪いってんだ！もしそんなやつがいるってんなら俺が直々にぶっ飛ばしてやるぜッ！」

彼は・・・スズキは僕の事を許してくれている。

ディアベル「はは・・・君には敵わないなあ・・・」

それだけ言うと僕は持っていた酒を一杯口に含んだ。

スズキ「・・・アンタはスゲーよ」

ディアベル「え？」

スズキ「ここにいるみんなが今こうして一つになって楽しく笑って話したり酒を飲んだり美味しいものを食べられるのは他でもないアンタがまとめ上げてくれたからさ」

ディアベル「・・・」

アハハハハハ！！最高だぜ！！ガッハッハッハッハ！！

スズキ「そのアンタの力をこれからもこのデスゲーム解放の為に使って欲しい。これはアンタにしかできないことだ。少なくとも俺はそう思うぜ！ディアベル！」

気付けば僕は泣いていた。

スズキ君のその言葉に僕は救われたんだ。

だけど彼の目の前で泣きじゃくってなんかいられない。

ディアベル「ありがとうスズキ君。これから僕はみんなを助けるために尽くすよ！」

スズキ「おう！頑張ってくれよ！」

ディアベル「うん！よければフレンド交換しないか？」

スズキ「いいぜ！」

その時スズキは知らなかった。

現段階で正式にフレンド登録をしているのはキリトとクラインのみ。フレンド登録をすると相手の情報も見ることができる。

つまり……

ディアベル「へ？れ．．．レベルひゃ．．．ひゃくにじゅう．．．い
ち．．．．．？」ガクガクブルブル

ピーーーー

ボタン

スズキ「え？ディアベル？どした？」

エギル「た．．．大変だ！ディアベルのHPが0に．．．！」
キバオウ「ディアベルはあああああん！」

なんかディアベルが急に倒れてポリゴン化しそうだったから急いで
俺の蘇生薬で復活させておいた。

あぶねーあぶねー

後に復活したディアベルはこう呟いた。

ディアベル「り．．．理不尽だ．．．」

同じベータテスターだったにも関わらずディアベルは軽いショック
を受けていた。

ディアベル（ならもっと強くならないと！強くなってみんなを引ッ

張るんだ！)

同時に一つの決意を胸に彼は前へと進むのだった。

第4話：攻略よりも大切なもの

第一層を無事攻略した俺達は次の目的へと移行すべく出発の準備をしていた。

アスナ「もう行くのね・・・」

スズキ「まあな」

キリト「本当は君にもついてきて欲しい所なんだが・・・」

アスナ「・・・」チラッ

A s u n a : L V 1 4

K i r i t o : L V 2 7

S u z u k i : L V 1 2 1

アスナ「まあそうよね・・・2人は私なんかよりずっと強いわ。きっと私がいても足手まといに・・・」

スズキ「！それは・・・！」

キリト「それは違う」

彼女の嘆きの言葉にキリトは口を開いた。

アスナ「え？」

キリト「君は強くなれる。君が今まで磨いてきたその剣の力はきっと誰かのために役に立つはずだ」

アスナ「キリト君……」

キリト「だから、もし誰かにギルドの誘いを受けたら絶対に断らないで欲しい。このゲームでのソロは極めて危険だ。誰でも良い。誰かと手を取り合えば君にとって、そしてその誰かの大切な人達のためになるはずだ……何より君自身に死んで欲しくないんだ」

アスナ「キ……キリト君……」

スズキ「ええ〜オッホン！」

キリト「！」

アスナ「ふえ？」

スズキ「まったくよお〜、そういう会話は一目のつかない路地裏か宿の個室でするもんだぜ？お二人さん？」

キリト「ご……ごめん……」／／
アスナ「い……いえ……こちらこそ……」／／

すっかりムードに入りきっていたせいで本題を忘れるところだったから俺は二人を正気に戻しといた。

てかもう付き合っちゃまえよ！バーカ！バーカ！

スズキ「まあここからはしばらく別行動だな。一層を攻略したとはいえまだビギナープレイヤー達は大勢いる」

キリト「ああ。彼らを凶悪なモンスターから護り、俺たちの持つ情報もできる範囲で共有していくんだ。時間はかかるかもしれない。だけどそれが俺たち元βテスターにできる事なんだ！」

アスナ「そうね……だったら私も今より強くなってみせるわ！強くなってまたあなた達と再び会うことを約束する！」

スズキ「おう！頑張れよ！アスナ！」

アスナ（けど……スズキ君みたいにはなれないかな……）

キリト「またいつか会おうな！アスナ」

アスナ「……ええ！」ニコッ

こうして俺たちはアスナと別れたのだった。

スズキ「キーリート♪もしかして惚れたか？」

キリト「なっ……！そ……そんなわけ……！」／／

スズキ「そうか？普通そんなセリフを言う奴は顔を赤らめて焦ったりはしないんだぜ？」ニヤニヤ

キリト「そ．．．それよりだ！これからどうするか考えないか！？
なあ！」

うわあ．．．すぐに話を変える奴．．．

まあいつまでも本題に入れそうにないし戻るか。

スズキ「まず俺たちは次の階層には向かわずビギナープレイヤーの生存を第一とする。それでいいな？」

キリト「ああ。もしここで俺たちが次の階層に向かったとして攻略のスピードは確かに上がる。それはつまり俺達のいない場所で大勢のプレイヤーが死ぬことにも繋がる。だからできる限り攻略には加担せずビギナープレイヤー達の救出を最優先とすることだな？」

スズキ「その通りだ。だとしてもよおキリト。いくらなんでも人手足りなさ過ぎやしないか？」

俺の記憶ではこのゲームに囚われたのが確か一万人くらいだったか？そこから1000人の元βテスターを引くとおよそ9000千人。そこから更に死亡者約400人を引くと、現時点でのビギナープレイヤーはおよそ8500人。

これまでの一ヶ月でまだ数百名くらいしか救えていない。

これからまた数段忙しくなるな．．．トホホ

スズキ「何か解決策はないのか？」
キリト「・・・他に元βテストの協力者がいれば救出範囲を広げられるんだが・・・」

「ならその仕事、僕にも手伝わせてくれないか？」

キリト「！アンタは！」

スズキ「ディアベル！そうか！ちょうど良いぜキリト！ディアベルも俺達と同じ元βテストなんだ」

キリト「何！？本当か！？」

ディアベル「ああ。俺もベータではそれなりに進んでいたからね。情報もある程度は提供できる身であるよ。何より・・・僕も君の力になりたいんだスズキ君！」

スズキ「ディアベル・・・」

ディアベル「それに僕にも数人元βテストの知り合いがいるんだ。彼らにも協力を要請してはどうだろうか？」

スズキ「マジかよ！助かるぜッ！」ガシッガシッグッ

ディアベル「ああ！」

キリト（こ・・・この人とスズキは一体どんな関係なんだ・・・？）

こうしてディアベルのほかに数人の元βテストターの連中を引き連れ、俺達は次の道へと進んだのだった。

それから一年が経過した。

「???」我ら月夜の黒猫団に……………乾杯!!!」

「「乾杯!!!」」

「???」でもって命の恩人キリトさんとスズキさんに……………乾杯!!!」

「「乾杯!!!」」

スズキ「乾杯ッ!!!」

キリト「か……………乾杯……………」

「さっきは本当にありがとうございました！！」

「お二人がいなければかなりやばかったですよ」

「本当にありがとう。スズキ君」

スズキ「いいっていいってケイタ、テツオ、サチ」

テツオ「まじばねっすわ！特にお二方のあの剣捌き！！あれはマジでしびれましたわあ」

サチ「凄く・・・かっこよかった・・・」

この一年で色々と変化があった。

俺たちは順調に階層も進めつつビギナープレイヤー達の救出も行ってきた。

もちろん自身のレベリングもしつつクエスト攻略もやりまくったな。

ケイタ「へえ、元βテスターでビギナープレイヤー達を・・・もしかしてお二人は『盾』に所属されているのですか？」

ケイタの言う『盾』と言う単語。

それはディアベルが新たに加わったキバオウのおっさん達と一緒に設立したギルドだ。

正式名称は『蒼聖の盾』。

始めは数人程度のビギナープレイヤー達の救出兼彼らの護衛役という形で活動を展開しており、今ではギルド最大勢力とも言われるほどまでに成長していった。

彼らはリーダーであるディアベルを中心に俺達と同様ビギナープレ

イヤー達の救出に加え、アイテムや情報の提供及び共有、時には階層攻略の際にもその力を存分に振舞ってきた。

キリト「俺達はずっと2人でパーティを組んできた。だから大型ギルドにはどこにも所属していない」

スズキ「たまに他のパーティのクエストの手伝いをしたりはしているがな」

ササマル「へえ、なんだか傭兵みたいっすね！」

スズキ「まあそんなところだ！」

テツオ「凄いなあ。俺達もお2人のように強くなっている。いつか『血盟騎士団』か『盾』の仲間入りに……」

現時点でこのSAO内では勢力最大の『蒼聖の盾』、そして攻略において最強の『血盟騎士団』で大きく二分化している。両者は共に矛と盾の関係性となっておりほとんどのプレイヤーがこの二つに影響を受けつつある。

ケイタ「あのお……お2人も。大変失礼だと思っすけどレベルっていくつくらいなんですか……？」コソコソ

キリト「俺は今LV84だ」

ケイタ「ふあ？」

ササマル「は……はちじゅうよん!!?」

サチ「私達の倍以上……」

ダッカー「どうりであの強さなわけだ……」

キリト（まあ高難易度クエストをスズキと回りに回ったからなあ・
……）

スズキとパーティを組んでいる俺は数々の高難易度クエストを攻略
すればモンスターを倒した際やクエストクリア時の経験値が共有さ
れる。

ここまでレベルが上がってしまうのも当然だ。

キリト（おかげで「二刀流」と言う謎のスキルも手に入ったんだが
……これはまだ使う機会はなさそうだ）

ケイタ「そ……それで……スズキさんのレベルは……」

スズキ「164」

ケイタ「(。d。)」「ブクブク

テツオ「(。口。)」

サチ「()」

ダッカー「(。皿。)」

ササマル「(。d。)」「

ケイタ達はしばらくフリーズしていた。

無理もない。スズキのレベルはすでにSAO内において異色だからな。

そしていち早く復活したササマルがこう提案してきた。

ササマル「あ……あのキリトさん！スズキさん！うちのギルドに入ってくれませんか！！？」バァァン

キリト「うーん、ギルドか・・・悩むな・・・スズキはどうなんだ？前にヒースクリフって人にスカウトされていたような・・・」
ケイタ「ええ！？ヒースクリフってあの血盟騎士団の団長じゃないですか！！」

ダッカー「団長自らスカウトしに来るなんて・・・」

ササマル「スズキさんパネえ・・・」

サチ「そ・・・それで返事は・・・？」

スズキ「ああアイツか。もちろん断っただぜ☆」

ケイタサチテツオササマルダッカー「「「「へ？」「」「」」

スズキ「ほら、血盟騎士団ってなんかこう堅そうな雰囲気だろ？おまけにそのヒースクリフって奴が副団長の席を与えろとかなんとかって持ちかけてきたんだよ」

ケイタサチテツオダッカーササマル「（。○。）」ポカーン

キリト「別に悪い条件じゃないだろ？血盟騎士団の副団長となるとそれ相応の身分も約束されるし立場的にも何不自由のない生活も望めるはずだと俺は思うんだが・・・」

スズキ「それはあれだろ？血盟騎士団に入りほとんど攻略のために最前線で戦わされる前提での話だ。そもそも俺自身そんなに生活には困ってねえし」

キリト（そうだった・・・コイツの所持金はカンスト目前だったような・・・）

スズキ「それに俺達の目的と大きく違うだろ？」

キリト「そうだったな。確かにあのギルドは俺達には合っていない。断って正解だったかもな」

ケイタサチテツオダツカーササマル」（。。。）「ポカーン」

キリト「だったら『蒼聖の盾』は？あそこならお前も馴染めると思うんだが」

スズキ「あーーーーあそこは良いっちゃあ良いんだが・・・」

数ヶ月ほど前

俺はある日ディアベルに呼び出された。

ディアベル「やあスズキ君！待ってたよ！」

スズキ「ようディアベル！！あれから元気してたか？」

ディアベル「ああ！！僕達のギルド『蒼聖の盾』は順調に活動が続けているよ！！！」

スズキ「そうか！それは良かった！ところで今日はなんで俺を呼び出したんだ？」

するとディアベルは真剣な眼差しで俺にこう言った。

ディアベル「スズキ君。僕達のリーダーになってくれないか？」

スズキ「は・・・はあ！？」

ディアベル「この数ヶ月考えてみたんだ。確かにこのギルドは大きく成長を遂げた。だけどそれは僕だけの力じゃない。スズキ君！ほかでもない君のお陰でもあるんだ！」

スズキ「え？お・・・俺？」

「???? あ！あの人だ!!!」
「???? スズキさんだ!!!」
「????」「????」わああああああああああああ「」「」「」「」

突如数十名のプレイヤーが俺に押し寄せてきた。

スズキ「オイオイ!!!ちょ……なんだよこの人達は!!!?」

ディアベル「この人達はみんな君に命を救われたプレイヤーなんだよ。スズキ君」

よく見れば確かに見覚えがある。

この数ヶ月で助けられたプレイヤーの数はおよそ3000人ほど。何人が犠牲者はでってしまったものの、俺達の手の届く命を助けてきた。

ディアベル「君達に救われたプレイヤーは君達に憧れて今ではこの『蒼聖の盾』に所属している」

マジかよ……多すぎだろ……勢力だけで言えばSAO最大レベルじゃねえか?

「?????」お！珍しい顔振りやなッ!!!」

スズキ「！キバオウのおっさん！」

そういえばこの人もこのギルドに入ってたんだ。

キバオウ「ひっさしぶりやな！おっと紹介するで！コイツらはこのギルドのサブリーダー的ポジや！今ワシらは各拠点に分かれて活動規模を広げてるねん！ホラ！挨拶せんか！」

シンカー「は・・始めまして。シンカーと申します」

ユリエール「私はユリエールです。此度は来て頂きありがとうございます」

シンカーと名乗る一見穏やかな細身の男、そしてユリエールと言う伶俐で長身の美女が挨拶をしてきた。

コーバツツ「俺はコーバツツだ！！よろしくなッ！スズキ！」

ゴツン

キバオウ「アホウ！さんをつけんかい！さんを！」

コーバツツ「イテッ！！殴らなくて良いじゃねえかキバオウさんよお・・・俺はただ自分より年下の人間に敬語は使わんだけだろうに！」

シンカー「まったく・・・相変わらず頑固な人だな・・・」

ユリエール「すみませんスズキさん。決して悪い人じゃないんですが・・」

スズキ「いや全然いいですよ！」

コーバツツと名乗る大男に呆れる二人であったが彼らは決して険悪な仲ではなさそうだ。

ディアベル「皆さん！任務お疲れ様です！」

キバオウ「ディアベルはん！」

シンカー「リーダー来てたんですね！」

ユリエール「ああ・・・お勤めご苦労さまです・・・リーダー・・・」

／
／

あれ？ユリエールさん明らかに顔赤らめてないか？

まあ気のせいか・・・

コーバツツ「なんだよリーダー！来るんだったら連絡くらいしろよなッふべしッ」バキッ

ユリエール「コーバツツ？リーダーの前では必ず敬語を使えとあれほど言ったはずですが？」ニコッ

コーバツツ「ひ・・・ヒッ！わ・・・悪いリーダー！」ガクブル

あのうユリエールさん？メッチャ笑顔が怖いんですが・・・

俺もディアベルにはほぼタメ口なのですがそれは大丈夫なのでしょうか・・・

ディアベル「まあまあ。別に俺は構わないさユリエール。リーダーって言われるほどでもないし」

ユリエール「いえ・・・そんなことはありませんわ」／
／

ありや完全にディアベルに惚れてるな。

まあディアベルは真面目で正義感が強くリーダーシップもあってイケメンだしな・・・

チクショー！！いいとこばっかじゃねえか！！

ディアベル「今日みんなに会いに来たのは他でもない。スズキ君を僕達『蒼聖の盾』のリーダーにしないかということだ」

シンカー「！」

ユリエール「！？リ・・・リーダー？」

コーバツツ「本気かよッ！？」

まあみんなが驚くのは無理もない。

だって今日急に現れたガキが急にリーダーになるっていうんだしな。

シンカー「そういうことなら僕は賛成ですよ！」

コーバツツ「俺も賛成だ。リーダーがそこまで言うってんなら否定はしねえ」

キバオウ「ワシはまあ言わんでもわかるやる！！大歓迎やで！！スズキはん！」

あれ？意外と迎えられてる？

ディアベル「意外かい？別に不思議ではないよ。君自身の力は彼らもよく知っているからね。何より彼らも君に助けられた身でもあるからね」

スズキ「俺が？」

ディアベル「正確には、君の「人々を助けるといふ想い」が彼らを救ってくれたんだ。あの時僕の手を取ってくれた君がいたからこそ今の彼らがいるんだ」

そうだったのか・・・俺の知らないところでもちゃんと助けられた人がいたんだな。

ユリエール「私も賛成です。例えリーダーが変わっても・・・ディアベルといられるなら」／／

ディアベル「うん？僕がどうしたって？」キョトン

ユリエール「な・・・なんでもありませんわ！」／／

この感じだとユリエールさん片思いって感じだな。まあディアベルってそういうところ鈍感そうだし

ディアベル「みんなは賛成の意見だ。スズキ君。あとは君の意見だけ」

スズキ「ありがとうディアベル。だけど俺はこの提案は受けられない」

キバオウ「!?!」

シンカー「そんな!」

ディアベル「・・・理由を聞いても良いかな?」

スズキ「まずこの『蒼聖の盾』はディアベルが作ったんだろ? だったらそれは他でもねえアンタがリーダーをすべきだ。二つ目は単におれ自身がリーダー的ポジするのが苦手なだけ。昔からあまり誰かのリーダーになった事もないしやろうとした事も無いんだよな。俺は自由にのんびりしたい派だからな。スマン」

流石にこんなこと言ったら怒るんだろうか・・・

キバオウ「ワシは別に構わんど。スズキはんのしたいようにすればいいで!」

シンカー「そうですね。無理にリーダーを任せるのもこっちとしては不安は積ります」

スズキ「まあそうだよな。だからやっぱリーダーはディアベルのほうが良い。それでいいか?」

しかし彼らはそれでさえ許してくれる。

なんていい人たちなんだよ・・・

ディアベル「……正直残念だったけれどスズキ君がそこまで言うなら仕方ないね。君が自由を望むならこれ以上無理に勧誘するのは辞めておくよ」

スズキ「悪いなディアベル。これは俺の性格上の問題なんだ」

ディアベル「いいんだよ。君がそこまで言うのなら僕もこれから『蒼聖の盾』のリーダーとして頑張ってみるよ！」

スズキ「おお！！頑張れよ！」

そうして俺が振り返ろうとしたディアベルはこんな事を言った。

ディアベル「そういえば気もつけて欲しい。最近プレイヤー同士が殺し合いをするという嫌な噂が流れているからね」

スズキ「……俺もその噂は聞いている。もし本当にそんなやつらがいるってんなら……」

俺がぶっ飛ばしてやるぜ」ゴゴゴゴゴゴ

ディアベル（なんて気迫だ……こっちも調査してみる必要があるな……）

スズキ「て言うことなんだ。」
キリト「まあスズキが決めたことだったら仕方がない。俺もあまりギルドの一員ってのは好きじゃない。これまでずっとソロでやるつもりだったしな。というわけなんだケイタ。悪いが俺達はギルドに入るつもりは無い」

ケイタ「いえいえ全然いいですよ！！むしろこっちから無理に入れてもしたら気分もあまりよくないですし」

テツオ「そうっすよね！だってお2人はめっちゃくちゃ強いですし！」

ササマル「やられるとも思えん！」

キリト「ありがとう。代わりに言うては何だが良い狩場を教えるよ。そこなら今の君達のレベルでも十分可能だ」

ケイタ「い・い・いんですか！？そこまでしてくれて」

キリト「構わないさ。このゲームで俺は誰も死んで欲しくない。だからみんなには強くなって生きて欲しいんだ」

キリトのその言葉は月夜の黒猫団のメンバーに大きな感銘を与えた。

ケイタ「キリトさん……」

ササマル「くう……泣ける……」

テツオ「だったらキリトさん！お願いします！！」

キリト「ああ」

サチ「……」

ん？あのサチって子ちょっと心配しているようだな。

だったら……

スズキ「なあキリト。しばらくケイタ達の護衛につかないか？」

ケイタ「え！？い……いや……そこまではしなくても」

キリト「……そうだな。いくら狩場とはいえ何があるかわからないのがこのゲームだ。いつでもピンチ時に備えておいたほうが良い。それでいいか？」

ケイタ「……正直不安でした。けどお二人がついてくれるとい

うなら・・・」

ダッカー「頼もしいっす！」

サチ「・・・ありがとうスズキ君」

スズキ「いいっていいって♪」

キリト「わかった。それならしばらく同じパーティーとして動こう」

そうして俺とキリトは一旦パーティーを解散し再度月夜の黒猫団のパーティーメンバーに入ることにした。

半年ほど前・・・

ヒースクリフ「マズイマズイマじゅい！・・・！どうする！なんだあのプレイヤーはッ！！第10層のボスをほぼ一撃で・・・！」

男ヒースクリフの中の茅場明彦は大きく混乱していた。

依然彼は第10層でスズキと初めて対面し、その強さを身をもって実感したのだ。

ヒースクリフ「強すぎるッ！！しかもよりによってβテスター内で

は強すぎて廃止したはずの双剣をなぜ彼は持っているんだッ!!!
う……私とした事がこんな重大なミスをッ」ガン

そう。

実はスズキの操る双剣とはβテスター内において最強の武器だったのだ。

攻撃・防御を自由自在に同時に行えるうえにソードスキルにおける最大火力はβテスター内では間違いなく最強クラス。

しかしその分扱いが困難なため誰も扱おうとは考えなかった。ただ一人を除いて。

故に本作SAOにおいては廃止をしたはずだったが、何らかの不具合によってこの世界で一つだけ実在してしまったのだ。

ヒースクリフ「このままでは私が倒されるのも時間の問題!!!どうするどうするどうする!!!?」

いくら自分がゲーム開発者とはいえ一人のプレイヤーのステータスまでは操作できない。

システム管理者権限によるプレイヤーへの干渉ができるのはせいぜい他プレイヤーの麻痺や毒などの状態異常による機能停止のみ。

しかしそれは頻繁に使っては怪しまれてしまう。

ヒースクリフ（彼ほどのレベルなら状態異常無効化のスキルを持っていても不思議ではない……システムアシストを搭載したとしても勝てるヴィジョンが……）

彼は考えに考えた。

30分後

ヒースクリフ（そうだ！彼をこちらに引き込もう！そうすれば私の支配下で動かせるはずだ！攻略にあまり加担できないようにすれば
・・・）

数日後

ヒースクリフ「やあスズキ君。以前ボス攻略の際一度会ったね。改めて血盟騎士団団長を務めるヒースクリフだ。よろしく」アクシユスズキ「は・・・はあ。スズキです。よろしくお願いします」アクシユ

オイオイ！！ヒースクリフダッテ！？スゲェ！！ナマデハジメテミター！！オーラヤベエ！

トナリノヤツハダレダ？アクシユシテルゾ！？トリハダヤベェンダ

ケドー！！

スズキ「スゲエなアンタ。注目の的じゃねえか。メツチャ強いんだろ？」

ヒースクリフ「フッ。君ほどじゃないさ」

スズキ「ん？」

ヒースクリフ「今回君に会いに来たのは他でもない。スズキ君。私率いる血盟騎士団の一員にならないか？」

スズキ「え？」

ヒースクリフ「君の力は十分に熟知している。望むのであれば我ら血盟騎士団の副団長の席も与えよう。ああ。生活面においては何も心配はいらない。君の周りのことに関してはこちらで負担をしましょう。要するに君の将来は約束されたも同然なのだよ」

ヒースクリフ「カラスカウトサレテルゾ！！アイツモシカシテスゴイヤツナノカ！？フクダンチョウツテマジカヨ！？スゲエ！！」

ヒースクリフ「フッフッフ。ここまで条件を出したんだ！いける・
・・・行けるぞー！！」

スズキ「わりい・・・やめとくわ」

ヒースクリフ「!?!」

民衆「「「「(。D。)」「「「「」

スズキ「血盟騎士団ってあれだろ？攻略を中心に活動するギルドだったっけ？」

ヒースクリフ「う・・・うむその通りだが・・・攻略はこのゲームにおいて何よりも優先すべきものだからな」

スズキ「だったらこの話は乗れない。俺には・・・攻略よりも先に大切なものを守る必要があるからな」

ヒースクリフ（攻略よりも大切なものだ！？それは一体・・・）

スズキ「そういうことなんだ。わりい他当たってくれ。転移ロービアっと」

シュン

ヒースクリフ「ま・・・待ってk・・・そんな・・・」ガクッ

エエエエエエ！？ヒースクリフノサソイヲコトワッター！？アイツバカナノカ！？モツタイネエ！

ヒースクリフ（ヤバイヤバイヤバイ！！絶対に……彼に殺される……！！）ガクブルガクブル

こんなにあっさりと提案を断られるとは彼自身微塵も思っていないかったのだろう……

それからヒースクリフは数日間眠れない夜を過ごしたのだった。

第5話：生きている世界

俺とスズキは一時的にケイタ達『月夜の黒猫団』の護衛に着くことにした。

できる限りモンスターとの戦闘にも慣れておく必要があったから、まずは基本的な戦術を教えることにした。

カマキリモンスター『キシヤアアアアアアアアアア』

サチ「きゃあッ・・・！」

ガキイイン

キリト「サチ！一旦下がるんだ！！！」

カキイイン

カマキリモンスター『キシヤアアアア！？』

キリト「テツオ！スイッチ！」

テツオ「でやあああああッ！！！」

テツオの放った一撃によって、カマキリモンスターはポリゴンと化した。

キリト（チームバランスはいい。後は経験を積みめば）

テツオ「よっしゃあああ！！レベル上がった！！」
スズキ「やったな！テツオ！」ウデガシッ
テツオ「ああ！！俺もいつかスズキのようにッ．．．」チラッ

T e t s u o : L V 2 3

S u z u k i : L V 1 6 4

テツオ（遠すぎる．．．ッ！）ガクッ
スズキ「え？なんで落ち込んでんの．．．？」

そして少し休憩を挟んだ。

サチ「．．．．はぁ」
スズキ「最後惜しかったな．．ホラ！」スッ
サチ「！スズキ君．．ありがとう」

俺は自分アイテムポーチから回復薬を取り出しサチに渡した。

スズキ「気にすんな。後君付けは無しにしようぜ？俺もずっとサチ

って呼んでるし♪」

サチ「・・・うん。ゴメンね・・・スズキ」

スズキ「なんで謝るんだよ？」

何か悩みを抱えているようだったサチを見て俺は思わず彼女の隣に座ってしまった。

サチ「私怖い・・・このデスゲームが始まってただずっと怖くて・・・さっきだってモンスターが攻撃して来た時、私怖くてみんなを守れなかった。私の気弱な気持ちがみんなに迷惑かけてばかりで・・・」

スズキ「サチ・・・」

サチ「やらなくちゃ行けないってことはわかってるよ・・・だけどいざ敵を前にすると身体が動かなくて・・・私死ぬのが怖い・・・」

死ぬのが怖い・・・か

キリトがなぜ彼女の武器を槍から盾へと変えたのか今ならよくわかる。

スズキ「俺だって一時期はかなり悩んださ。ちょっとした油断でモンスターに攻撃されHPが0になったらって。今だって時々震えが止まらないことだってある」ブルブル

サチ「スズキもなんだね・・・」

スズキ「・・・だけど決めたんだ。俺にとっての大切なものを護るって。そのためにも俺は生き続けたいといけないんだ」ギュー

気付けば俺は拳を強く握っていた。

スズキ「怖いのは誰だって同じだ。別にそれは悪い事なんかじゃない。だからあまり思い詰めんなよ」

サチ「・・・ねえ。一つ聞いていい？どうしてスズキはそんなに強くなれたの？」

スズキ「俺か？・・・俺はだなあ・・・」

サチに言われたとおり俺は自分がなぜここまで強くなれたのか事の発端を説明した。

スズキ「ってなことがあってよぉ、あまりにもベータの中に居過ぎたせいで現実がこっちなんじゃないかって何回も焦ったぜ☆」

サチ「流石に15時間はやりすぎだよ・・・体調管理もちゃんとしないと！」

スズキ「いやぁ俺ってばゲーム好きだからさぁ一度ハマるとやめられない性格なんだよなぁ♪」

サチ「もう・・・たまには外に出たほうが良いって〜」

しばらく話して行くうちにサチは徐々に自分の気持ちを表に出して行き、表情から少しずつ悩みも打ち解けて言った気がした。

スズキ「わりいって♪まあけど結構楽しかったぜッ！」

サチ「うーん私には無理かな・・・ゲームは好きだけどそれを一人でずっとやり続けるって・・・」

スズキ「元々俺は一人の方が好きだったからな・・・そっちのほう

がこう達成感があった。・・・前まではな」
サチ「前までは？」

スズキ「この世界に来てわかったんだ。一人でやるよりもいろんな人と出会って助け合ったほうが良いなって」

サチ「いろんな人・・・」

スズキ「一人じゃ気づけなかったこともよお、周りと協力して達成した方がより多くのものに気付けたんだ。キリトやディアベル、アスナ、キバオウのおっさん、エギル、クライン。そしてここにいるケイタやテツオ、ササマル、ダッカー、そしてサチ。お前も含めてな」

サチ「私も・・・？」

スズキ「みんなで戦って笑って怒って、時には泣いて悲しんで。その時思ったんだ。ずっとこうやってみんなの「生きている世界」を見たいって。だから俺は決めた。戦って・・・俺自身の力でみんなを助けるって」

サチ（助ける・・・みんなを・・・）

スズキ「全部は無理であってそれはただの傲慢なのかもしれない。だけどそれでもいい。俺は俺の手の届く人達を助けてやりたい。きっとその想いが俺自身をより強くしてくれてるんだと思う」

サチ「・・・やっぱりスズキは凄いや・・・私なんかじゃなれないよ・・・」

スズキ「何言ってるんだよ？サチはサチだろ？」

サチ「え・・・？」

スズキ「俺にならう必要なってねえってことさ。サチにはサチの良

いところがあるだろ？」

サチ「た・・・例えば・・・？」

スズキ「まず自分の弱さを知っているところだな。弱さを知る人間はいつかきつと強くなれる。だって自分の弱さを知っている人間ほど周りのやつらの力になれるだろうし、自分も学べるものがより増えるはずだ」

サチ「確かにそうかもしれない・・・けど私はの場合本当にただ弱いだけかもしれないよ？」

スズキ「サチは弱くなんかない。さっきカマキリのモンスターに攻撃された時だって逃げようとはしなかつたろ？それがサチが弱くなんてない何よりの証拠だ」

サチ「そ・・・そうなのかな・・・？」

スズキ「ああそうだ！そして二つ目は誰かを守ろうとする意志だ。さっきのみんなを守ろうとする気持ち。それはきつとサチ自身を強くする大きな原動力になるはずだ」

サチ「みんなを守ろうとする気持ち・・・か。どうなんだろう？私はただ逃げているだけかもしれない・・・」

スズキ「それはないと思うぜ？サチだってもう気付いてるんだろ？自分にとって守りたいって思える奴らが」

サチ「！」

ヨッ！リーダー！カッコイイ！マズハレベル30ナ！アッハッハッ

サチ（そうだ・・・！私にだってあるんだ・・・大切なもの・・・

・
)

スズキ「そういうことだ！それから・・・（あ・・・あれ？思い浮かばないぞ！どうしよう！？考えろ考えろ考えろ考えろ・・・ハッ！こうなったら最終手段だ！迷っている暇はない！これもサチのためなんだ！行くぞ・・・！）」

み・・・三つ目！サチは可愛いッ！」

サチ「・・・ふえー!!?」／／

スズキ「その黒いセミロングに右目の下に泣きホクロ！そして誰とも構わず話せるフレンドリーな性格！すべてがパーフェクトだ！」
サチ「ちょ・・・ちょっと・・・！やめて・・・その・・・恥かしいよ・・・」／／

私は何を言っているのかわからなかった。

だって・・・私が・・・可愛いなんて・・・

スズキ「ホラな？サチにはこんなにも良いところがあるんだぜ？」

サチ「！」

スズキ「俺にならうなって意味がわかったろ？サチにはサチの良さ、そして強さがあるんだ」

そして俺はサチの肩を軽く叩いてこう言った。

スズキ「だから自信持てって。危ない時は俺がいつでもそばにいるか

「らよ

サチ「そう・・・か・・・うん！ありがとうスズキ！ぐすっ・・・な
んかちょっとだけわかった気がする！」

私は涙を流しながら微笑んだ。

スズキの言葉は私に勇気をくれた気がした。

スズキ「おう！頑張れよ！サチ！」

サチ「ぐすっ・・・うん！」ニコッ

そして私はこのSAOに囚われて初めて思いっきり笑った。

ケイタ「おーい！サチ！そろそろ行くぞ！」

サチ「うん！待ってねケイタ！」ニコッ

テツオ「!？」

ササマル（あのサチが笑っただとおおお!?）

ダッカー（やべえ・・・思わずキュンとしちまった・・・!）／

ケイタ「な・・・なんか嬉しいことでもあったか？」

サチ「ぜ・・・全然!!そんなことはななないよ！」アセアセ

ケイタササマルテツオダッカー（（絶対なんかあっただろ・・・

・）（）（

キリト「どうやら上手く吹っ切れたようだな。助かったスズキ。ありがとう」

スズキ「俺はただきっかけを作っただけさ。吹っ切れたのはサチ自身のだ」

キリト「・・・」

スズキ「ん？どした？キリト」

キリト「いや・・・なんでもない」

スズキ「そうか。サチだけじゃない。ケイタ達だってこれから強くなれるはずだ」

キリト「そうだな。彼らは良いチームだ。いずれ攻略組の一員にも・・・」

スズキ「あ。攻略組で思い出したんが、キリト♪愛しのアスナちゃんとは上手く行ってるの？」ニヤニヤ

キリト「！？・・・アスナとは何も無い！その・・・たまに連絡を取り合ったりしてはいるが・・・」／／

スズキ「本当にそれだけかぁ？」ニヤニヤ

キリト「か・・・彼女だって今は血盟騎士団の一員なんだ。色々忙しいだろうし・・・早々会う機会は無いんだよ」しょんぼり

わかりやすいキリト君のシヨンボリ頂きました☆

スズキ「てことは早く会いたって事だろ？だったら休暇日とか誘って会いに行けばいいじゃねえかよ♪」ニヤニヤ

キリト「む・・・無理だって・・・！！」／／

ハッハッハッ　コノヤロー！！ツカマエテミロヨォ♪ジヨウトウ
ダ！オマツ！？スキルツカウノハナシダロ！？ギャーギャー

ケイタ「？どうした？サチ？」

サチ「・・・」ボー

（だから自信持てって。危ない時は俺がいつでもそばにいるからよ）

サチ（ああああああああ／あ．．．あれって半分告白なんじや．．．！？／そ．．．そばに．．．いるって．．．駄目よ私！私はまだ結婚できる年齢じゃないし！そ．．．そもそも私マトモにお付き合いましたこともないのにッ．．．）／アセアセ

一段落狩りを終えた俺達はケイタ達の宿泊している宿に泊まることにした。

ケイタ「ええ。ここでみなさんのご報告です！今日で．．．200000コル溜まりましたああ！！」

ワアアアア！！

その一段落レベルを上げたケイタ達は自身のログハウスに戻り、所持金が2000000コル溜まったことを発表した。

自分達の家を持つのも近いらしく彼らの顔には満面の笑みが浮かんでいた。

ササマル「なあなあ！サチの装備も整えたほうが良いんじゃない？」

サチ「うーん・・・嬉しいけどなんだか悪いよ。お金もできるだけ家を買うために残したほうが良さそうだし」

ダッカー「遠慮するなよ。いつまでもこの2人に前衛を任せるのはよくないしさ」

スズキ「まあまあそう言うなって♪俺達は平気だダッカー。サチ。

装備は整えて損は無いと思うぜ？きっとこれからの戦いにも役立つはずだ！」

サチ「・・・スズキが言うなら・・・わかった！ゴメンケイタ。

お願いしても良いかな？」ウワメヅカイ

ケイタ「お・・・おう・・・も・・・元々そのためでもあったからな

・・・」

（どうしたんだよッサチ！！今日なんだかいつもと雰囲気・・・）

／

そうして俺達は宿で食事をたしなみつつおしゃべりをした。

明日俺達は狩りもしつつ、サチの装備を購入しに街へ出掛けることにした。

その日の夜

キリト「フン!!」

ズ

バツバツバツバツバツザシュツ

モンスター『ギャアアアアアアアアアア』

パライイイイイン

キリト（なるほど・・・このスキルは確かに強力だ。だがまだ扱えきれない。もう少し練習が必要だな）チャキン

俺がこっそり28層でレベリングとソードスキルの練習を行っていた時だった。

???「お？キリトじゃねえか!？」

キリト「!クラインか!？久しぶりだな!」ガシツガシツグツ

クライン「ああ!!お前達最近随分と活躍しているようだなッ!」

キリト「まあボチボチだな・・・」

クライン「ん？スズキの奴は一緒じゃねえのか?」

キリト「今はパーティーメンバーと宿で休んでいる。俺は今レベルリングをしている最中だ」

クライン「ほえ。こんな夜中にレベル上げとはな……ってお前レベル高すぎんだろ！？……いつの間にそこまで……」ガクツ
キリト（まあほぼスズキのおかげだしな……）

久しぶりに会ったかつての友人クラインと会い、俺はそれまでの経緯を話合った。

オラァ！！ソレエエエ！セイッ！！

キリト「『風林火山』か……。いいチームだな」

クライン「だろ！多少遅れは取ったが、今じゃあ攻略組にも負けないぜ！」

キリト「ハハッ。だがまだまだアイツには遠く及ばないさ」

クライン「ぬぐっ……スズキの奴はまあ……ホラ異次元レベルだろ？」

キリト「……」

クライン「ん？キリト？」

キリト「アイツは凄い奴さ。アイツの言葉はいつだって多くの人の命、そして心をも救って来たんだと思う。アイツがいなかったらと思うと時々凄く不安になるんだ」

クライン「キリト……」

キリト「もしあの時、アイツと出会ってなかったら俺は今頃ずっとソロで生き残ろうとしてただろうな……他のプレイヤーのことな

んて何も考えずに・・・」

クライン「そうだな。アイツはスゲエ。だけど今じゃあキリトも同じ気持ちなんだろう？」

キリト「・・・そうかもしれない・・・。俺もアイツの言葉で救われた一人なのかもな」

そうして俺達はしばらく夜空の景色を見つめるのだった。

クライン「ま！何はともあれだ！お互い頑張ろうなッ。親友！」グ
ータッチ

キリト「ああ！ありがとう。クライン」グータッチ

そうして俺達は別れた。

スズキ「さーて♪そろそろ寝るかぁ♪」

ガチャ

スズキ「うん？」

サチ「ご……ごめんね。その……やっぱり眠れなくて……一緒に寝てもいい？」／／

クラインと別れた後俺はもう少しレベリングをしたあと宿へと戻った。

すると何やらケイタ達がスズキの部屋の前でコソコソしているのが見えた。

キリト「？どうしたんだケイタ？」

ケイタ「しーーーーー！静かに。キリトさん」

テツオ「うう……サチも遂に旅立ちの日が……」シクシク

テツオ「うんうん」シクシク

キリト「え？あの……何が……」

ダッカー「さっきね♪見ちゃったんですよ♪」コソコソ

キリト「な……何を……？」

ダッカー「サチのやつがね♪こっそりこの部屋に入って行ったところを」コソコソ

キリト「え……ええええええええええ！？もがっ」ガバッ

ササマル「ちょっ！声がでかいですよ！キリトさん！」コソコソ
キリト「わ・・・悪い・・・」

スズキの部屋にて

サチ脳内（はわわわわ／＼遂勢いで来てしまったけど冷静に考えた
ら私とんでもないことしちゃった／＼ど・・・どうしよう／＼これ
じゃ余計寝れなくなっちゃう／＼あーもう私のバカ！なんでこんな
事したのよおおお／＼す・・・スズキは・・・もう寝たのかな？）
チラッ

スズキ「・・・」シーン

サチ脳内（ホッ・・・良かった・・・寝てた。だけどやっぱり気が
散って眠れないよ・・・／＼）

一方のスズキはというと・・・

スズキ脳内（うおおおおおッ!?これどういう状況おお!?え!?
なんでサチが俺の隣で寝てるんだ!?いや落ち着けスズキ・・・こ
れまで通りにやればいいんだ。これまで通り・・・ッて俺は何を言
ってるんだああ!?彼女いない歴〃年齢の俺に何もできることな
んでないだろおおおお!てか?サチはなんでそんな平気なの?も
しかして実は経験人数豊富だったり・・・って俺は何を考えてんだ
よおおおおッ!?)

結局二人は一言も喋らず、ただ夜が過ぎ去るのを必死に待つのだっ
た。

第6話：悲劇

チュンチュン

朝のさえずりの音で俺は目を覚ました。

「夜明けコーラス」をまで再現するとは・・・相変わらずこのゲームはリアリティが大変凝っている。

スズキ「ふあああよく寝たああ・・・」

さて。今日も起きて頑張りますか！と決心をつけてベッドから起き上がった。

サチ「スーーーーズズズ」

スズキ「・・・」

うん。どうやら俺はまだ夢を見ているらしい。
自身の頬を軽くビンタした俺はもう一度確認した。

サチ「スーーーーズズズ」

スズキ「」

俺のベッドにてサチは凄く気持ちよさそうに寝ていた。

夢じゃなかった・・・

キリト「おはようスズキ。ん？・・・スズキ・・・？」

今日のスズキは明らかに様子が違っていた。

スズキ「何も・・・なかった・・・」チーン

キリト（昨日の夜一体何があったんだ・・・？なんて絶対言えない
・・・）

サチ「ふわぁ・・・zzz 久しぶりにぐっすり眠たぁ・・・」

カチャ

サチ「え？」

ダッカー「さ・・・サチさん！おはようございます！」

サチ「え？なんでみんなここに・・・？というか敬語・・・？」

ケイタ「サチ。俺達はお前のこと応援しているよ！」

テツオ「例えどこに行こうとも、お前はずっと俺達月夜の黒猫団の一員だ！」

ササマル「そういうこと。頑張ってよ！」

サチ「ど・・・どうということ・・・ハッ！」チラッ

スズキの部屋ドア「チャオ☆」

サチ「あ……あああああああ」／／

ひとまず落ち着いた彼らは準備の支度をして始まりの町へマイホームを買いに行くケイタを見送った。

テツオ「なあ！ケイタが家買いに行っている間に少し稼がないか？」

サチ「あ！もしかして家具をかうため？」

テツオ「まあそういうことだ！」

スズキ「いいなそれ！だったら俺達も手伝うぜッ！」

ダッカー「じゃあちょっと上の迷宮に行くか！」

キリト「うーん。危険かもしれないが確かに今より上の迷宮のほ

うが短時間でコルは集まりやすいしな」

スズキ「何かあったらじゃ遅いかもしれん・俺とキリトで分かれて二人の護衛をすれば良いんじゃないか？」

キリト「そうだな・・それなら安心だ」

そして俺達は第27層迷宮区で狩りを行うことにした。

キリトがテツオとササマル、俺はサチとダッカーにそれぞれ付いた。おかげで今のところピンチな場面はない。

ダッカー「結構余裕だったな！」

ササマル「そうだね。もう少しで最前線に」

ダッカー「あったばうよ〜！お？」

迷宮区を進んでいくとダッカーが隠し扉を見つけた。

中央には一つの宝箱が設置されていた。

スズキ（隠し扉・・？こんなところに・・？）

この時俺は思いもなかった。

まさかあんな悲劇を招くなんて

ダッカー「へっへっへっ♪」パカッ

勢いよくダッカーが宝箱を開けた瞬間だった。

ヴウウウウン ヴウウウウン

けたたましい警告音が部屋全体に鳴り響き、

スズキ「!!?」

キリト（トラップ!?こんなところに!?)

ダッカー「オイ・・・なんだよあれ・・・!？」

モンスター達『グオオオオオオオオオオ・・・』

キリト「!？」

部屋の奥から次々と大量のモンスターが現れた。

スズキ「キリト！二人を頼むッ！！」

キリト「！分かった！」

ササマル「な・・・なんだよ！コイツら！？」

まずはサチ達がクリスタルを使えるよう安全な状態に・・・

サチ「！？みんな・・・！クリスタルが使えなくなってる・・・！」

キリト「！ッ・・・クリスタル無効化エリアか！」

スズキ「クソッ・・・！やるしかねえ！サチ！ダッカー！できるだけモンスターの攻撃を防いでくれ！」

俺は腰から双剣を取り出し構え、ダッカー達に指示を仰ぐ。

ダッカー「防ぐたって・・・一体どうやって・・・どわッ！」

ダッカーは恐怖のあまり転んでしまった。

スズキ（ダッカーの奴・・・ッ！まさかちゃんとした防御のやり方を知らないのか！？）

昨日の狩りの時から薄々気付いてはいた。

彼らは集団での戦闘には慣れているものの個人での戦闘経験は少なかったのだ。

スズキ（マズイッ・・・！この距離じゃ・・・）

俺からかなり離れた位置にいたダッカーは、今まさにモンスターからの攻撃を喰らおうとしていた。

モンスター『グオオオオオオオオオオッ！』

ササマル「うわあああああッ！！」

カキイイイン

ダッカー「え．．．．？」

サチ「うっ．．．！ぐっ．．．」ギギギギ

そこには必死に盾を構えながら立ち向かうサチの姿があった。

ダッカー「サチ・・・お前・・・ッ！」

サチ（守らないきゃ！・・・私の・・・大切な人達をッ・・・！）
サチ「う・・・うあああああッ！」

カキイイイン

モンスター『グオオオオオオオッ！？』

決死の叫びでサチは自身の持つ盾でモンスターからの攻撃を弾いた。
しかし彼女達の周りには既に多くのモンスター達が取り囲んでいた。

モンスター×30『ウオオオオオオオオッ』

そしてモンスター達は一斉に彼らへ襲いかかる。

ダッカー「そんな・・・ッ」

サチ（みんな・・・ごめん・・・）

モンスター×30『グギャアオアアアアアアア！？』パリリリイ
イイイイイン

サチ「・・・え？」

完全に死を覚悟し切っていた私には、何が起きたのかわからなかった。

私達を取り囲んでいたはずのモンスター達が目にも止まらない早さでポリゴンと化していったのだから。

私の目の前には二本の真っ赤な刃を持った・・・

スズキ「よくやったな、サチ」

あの人立っていた。

サチ「スズキ……」

怖かった。

だけど彼の顔を見た途端、私は安堵の気持ちでいっぱいになった。

サチ（やっぱりスズキは凄いや……）

大型モンスター×20 『コオオオオオオオオオオオオオオオオセエエエエエツ』

ササマル「うわああああッやっぱり駄目だ！デカイ奴らが一斉に・」

スズキ「マジ・イグニッション」

ドバババババババババ

大型モンスター×20『ハベシイイイイイッ!?』パリリリイイ
イイン

ササマル「ふぁ?」(。ロ。)

サチ(うん。ちょっと強過ぎるくらいにね・・・)

スズキのソードスキルで私とダッカーを取り巻くモンスター達はほ
ぼ消え去っていた。

ダッカー「うわおおおあん!ありがとうおおおお!スズキさああ
おあん!」アシガシツ

スズキ「わあ!ちよおま!泣くなって・・・!」

ダッカー「サチもさっきはありがとうおおおおおッ!」

サチ「・・・わ・私は・・・」

何もしていない・・・

そう言いかけたときだった。

スズキ「な？言ったろ？」

ポン

サチ「！」

その一言と一緒にスズキは私の頭を優しく撫でた。

スズキ「お前は強いんだよ。サチ。だから誇れ。お前はお前の大切なものを守ったんだよ」

そうか。

今度は守れたんだね・・・私

サチ「うううう・・・グスッ・・・スズきいいいい・・・ッ！」
スズキ「うおっ・・・！？サ・・・サチ！？」

気づけば私はスズキに思いっきり抱きついていた。

サチ「えへへへへ〜」／／

抱きついた私は凄くホッとした。

彼の温もりは、なぜこんなにも安心感に包まれるのだろう・・・

サチ（そうなんだ・・・うん・・・そうよね）

なんでもっと早く気付かなかったんだろう・・・

凄く簡単な事じゃん・・・

私・・・

スズキの事・・・

好きになっちゃったんだ

時は数分前に遡る

キリト「テツオ！ササマル！できるだけはぐれるな！協力して敵に攻撃をするんだ！」

テツオ「あ・・・ああ！」

ササマル「まさかこんなことになるなんて・・・」

キリト（なぜこんなところにトラップエリアが！？何にせよ、状況は非常にマズイッ！）

キリト「だああああッ！」ザシュッ

モンスター『ギャアオアア』パリイイン

テツオ「うおおおおおッ！」ガキイン

ササマル「くたばれええッ！」ガキイン

テツオとササマルも必死し抵抗を見せるも、

モンスター『？グオオオオオオオッ』

キリト（！？テツオ達の攻撃が効いていない！？コイツら27層にしては強い・・・ッ！！）

テツオ「・・・！ササマル！」

モンスター『ワアアアアアアアッ！！』

一際大きい一体のモンスターがササマルに襲いかかろうとしていた。

テツオ「クソっ・・・！動けよ！俺の脚！」ガクガクブルブル

テツオは既に恐怖に飲み込まれてしまい動けなくなっている。

こんな状況だ。無理もない。

ササマル「く・・・来るなあああ！」

テツオ「くっそおおおおおッ・・・！！！」

キリト（駄目だ・・・やっぱり俺には無理なのか・・・？）

完全に諦めかけた時だった。

『俺は俺の手の届く人達を助けたい。そう決めたんだ』

スズキの言葉が一瞬俺の頭によぎってきたのだ。

キリト（違うッ！諦めたらそこで終わりなんだッ……！）

キリト「でやああああああああッ！」

ガキイイイイン

ササマル「キリト・・・！」

ギリギリで俺はササマルとモンスターとの間に割り込めた。

キリト「テツオ！ササマルと一緒に俺の後ろに居てくれ！」

テツオ「わ・・・わかった！」

ササマル「何をする気だッ・・・！？キリト！」

キリト（テツオとササマルの背後は壁。

つまり・・・敵は全部俺の目の前だけッ・・・！！）

大量のモンスター『グオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

ササマル「いくらお前でも一人じゃ無理だ！」

テツオ「俺たちのことは良い！逃げてくれ！キリト！」

ササマル達は必死にそう叫ぶ。

キリト「良いわけなんてあるかッ！」

ササマル「ッ！」

テツオ「キリト・・・」

キリト（アイツは・・・俺がこの世界で最も尊敬するアイツだったら・・・こんなところで決して逃げたりなんかしないッ！）

スーチャキン

テツオ「え・・・？」

キリトは背中からもう一本の剣を取り出し、彼は両方の手に剣を握った。

キリト（使わせてもらおうぞ・・・今・・・ここでッ！）

ユニークスキル『二刀流』発動

モンスター×15 『ウオオオオオオオオオオオ』

モンスター達は一斉にキリトへと襲いかかった。

ササマル「キリトッ・・・！」

圧倒的に数による暴力。

ササマルとテツオから見てキリトは絶対絶命だった。

キリト「でやあああああああああッ！！」

ジャキキキキキキキキキキイイイイイン

モンスター達『ウガアアアアアアア！？』パリリリイイン

ササマル「！？」

テツオ「す・・・凄い・・・」

一体何連撃だったのだろうか？

まさに圧巻。

キリトは自身の持つ二刀流スキルでモンスター達を次々と薙ぎ払っていった。

キリト「でりゃアアアアアアアアッ！！」

ザシュッ

その姿はまさに鬼神の如し。

キリト「あああああああッ！！」

ザシュッ

モンスター『ウギャアアアアアッ』パリリリイン

そして大きな叫びと共に彼は最後の一体を切り刻んだ。

キリト「ハア・・・ハア・・・」

ササマル「キリト！」

テツオ（なんてやつだ・・・）

テツオは周りを見る。

あんなに大勢に囲まれてたはずのモンスター達は、一体も残ることなく消えて去っていたのだ。

ササマル「本当に・・・ありがとう・・・キリト」

テツオ「お前のお陰で俺達は助かった・・・！ホントなんて礼をし
たら・・・」

ササマル達は涙を流しながらキリトへそう囁いた。

キリト「別に礼なんて・・・うっ」

ササマル「キリト！」

まだ不完全だったエクストラスキルを使ったことで、キリトの体力ゲージはほんの僅かしか残っていなかった。彼は勢いよく地面へ倒れそうになる。

ガシッ

キリト「！」

スズキ「そっちも無事終わったようだな。キリト」

キリト「スズキ……。ハッ……。そうだよな。お前がやられる訳ないか……」

スズキ「大丈夫か？ホラ。この完全回復ポーション飲んでけよ」スッ

キリト「サンキュー……。」ゴクッ

スズキのアイテムによってキリトの体力バーは満タンになった。

キリト「ふう・・・助かったよスズキ。危うくポリゴン化するところだったよ」

スズキ「マジで笑えないっつうの・・・というかなんだあのスキル？二本持ちの剣って双剣以外にもあったんだな」

キリト「これはユニークスキル"二刀流"。このゲームで一人のみしか所持できないと言われている両手持ちエクストラスキルだ」

ユニークスキルは特定の条件やクエストなどをクリアした際に習得することが出来るスキルだ。

キリト曰くこのSAO内にユニークスキルは十数種類あるのだと言う。

スズキ「ほええ。本当にあったんだな・・・けどよお、強力とは言え自身の体力ゲージが削り取られるほどなんだろ？危なくないかそれ？」

キリト「いや。体力ゲージが削られるのは単に俺の熟練度が足りてないだけだと思う。だけどいつかきつと扱ってみせるさ」

スズキ「マジで頑張ってくれよ？。じゃないといざ俺がいなかった時とかすぐ死んじゃうからな？」

キリト「・・・ははっ。そうだな。そのとおりだ」

こうして俺達は無事トラップエリアから脱出を果たしたのだった。

無事迷宮を脱出できた俺達はすぐにケイタにそのことを話した。

ケイタ「俺のいない間にそんなことがあったなんて・・・」

スズキ「・・・」

キリト「俺達がいながら危険な目に合わせてしまった。すまない。」

ケイタ「

ケイタ「・・・何を言ってるんだよ。俺達の仲間を必死に守ってくれたんだろ？」

ササマル「むしろ謝るべきは俺達だ。慣れもしない階層で稼ごうって軽い気持ちで行ったんだから」

サチ「うん。キリト達は何も悪くなんかないよ」

ダッカー「そうっすよ。だから謝らないで下さい」

キリト「みんな・・・」

ケイタ「それよりもキリト、スズキ。今日は僕達買った初のログハウスで一緒に宴会をしませんか？」

サチ「あ！それいいね！」

テツオ「そうだな！」

キリト「！良いのか・・・？」

ササマル「当たり前ですよ。なんてったってスズキとキリトは俺達の命の恩人なんだから！」

ダッカー「そうそう！割に合わないかもしれないけど、今日なんか奢らせてくださいよ！」

スズキ「こう言ってんだ。行こうぜ！キリト」

キリト「・・・フッ。ああ」

キリト（命の恩人・・・か・・・）

その日俺達はケイタ達のログハウスで宴を楽しんだ。

ダッカー「でその時！スズキさんヤバかったんですよッ！！あんな

に囲まれたモンスター達を何と一撃でッ！」

ケイタ「い……一撃……。ホント規格外な人だな……」

ササマル「キリトもとんでもなかったよな！」

テツオ「ああ！二本の剣を両手に握ってモンスター達を斬りまくったんだぜ！俺が女だったら惚れること間違い無しだ！」

アッハッハッハッ

すっかり上機嫌になった彼らは今日の出来事で盛り上がっていた。あの悲劇がまるで嘘だったかのように。

ケイタ（この人達がいなかったら、今頃俺達ここにいなかったかもな……本当にありがとうキリト、スズキ）

サチ「……………」

スズキ「今日はホント災難だったな」

サチ「……………そうね。だけど今日をきっかけに私……なんだか生まれ変わった気がした」

スズキ「……………確かにその通りかもな。もう今はあの時の泣き虫で弱かったサチはいない」

サチ「え……私ってそんな事思われてたの……？」シヨボン

スズキ「あ……！ち……違う！そういう意味で言ったんじゃない！」
アセアセ

サチ「ふふっ……ちゃんとわかってるよ。スズキはあの時そ

う思っていたから私をあの時励ましてくれたんでしょ？もう生きることを諦めかけていた私のことを・・・」

スズキ「・・・さあな・・・だけでもし本当に俺の言葉がサチに勇気を与えたんならちよっと嬉しいぜ」

サチ「うん！凄く感謝している。ありがとう！」

スズキ「おうよ！」

その日彼らが見た月は美しく光る満月だった。

そして俺達はしばらくケイタ達と共に安定した階層でできる限りの戦い方を教えた。

彼らのはあの日を堺に見違えるように強くなった。

キリト「本当にいいのか？」

サチ「うん。私はこの槍で戦うって決めたの」

完全に恐怖を克服したサチはコンバートした盾を槍に戻した。

まるでサチ自身の成長を表しているように。

そしてその日は訪れる。

ケイタ「キリト、スズキ。短い間だったがありがとう！」

キリト「ああ。また何かあったら呼んでくれ」

俺とキリトはもうここを立ち去らないといけない。

理由は昨日の夜。ディアベル達から応援の要請が入ったからだ。

彼らが応援を呼ぶほどだ。

きっと相応の苦難に仕入れられているのだろう。

ササマル「キリト！俺いつかぜったい攻略組の一員になるよ！」

テツオ「俺もだ！あの時は何もできなっかが今度こそ俺は……！」

キリト「……ああ！2人ならきっとできるさ」

ダッカー「スズキさん。俺達目標ができたんです」

サチ「うん」

スズキ「目標？」

ダッカー「あの時スズキさんに助けて貰ってから考えたんです。あの時みたいに今こうして俺達以外にも大切な人を失おうとしている人達はたくさんいます！だから俺達、その人達の力になりたいって」

サチ「うん。私達はいつか・・・」

ダッカーサチ「『蒼聖の盾』の一員になりたい（です）！」

彼らは守られる側から守る側になることを選んだのだ。

スズキ「・・・そうか。2人ならいつかなれるはずだ。頑張れよ！
2人とも！」

そして最後の見送りの言葉と共に俺達は転移クリスタルで待ち合わせの場所へ向かおうとした

その時だった

サチ「スズキ………!!」

スズキ「え？サチ？」

遠くからサチの大声が聞こえた。

サチ「私………!!スズキの事好き………!!」

スズキ「は・・・はあああ!!?」／／

何を言っているのかわからなかった。
きつと冗談のつもりなのだろう・・・

サチ「えへへへへ」／／

しかし彼女の表情を見る限り冗談ではなさそうだった。

シュン

唐突な告白を受けたスズキは、戸惑いながらクリスタルによって転移させられた。

ケイタ「ビックリしたぞー！サチ」

ササマル「ホントそれなー」

ダッカー「・・・まあでもこれでよかったかもな」

ケイタ「サチの想い・・・ちゃんとスズキに伝わったかな・・・」

サチ「どうかな・・・わかんない！だけど今はそれだって良い。私がいつか本当に強くなって彼の傍に立てれたら、その時はちゃんと私の気持ちを伝えたいかな」

テツオ「まったく・・・異性の相手の部屋には平然と入るしサチって結構大胆なんだな！」

サチ「うっ・・・いざ振り返ってみると恥かしいよ・・・」／／

アッハッハッハッ

シュン

キリト（あの場面で告白するとは……ビククリはしたが心配は要らないサチ。君の想いは無事スズキに伝わったのかもな）

スズキ（あのサチが……俺を……？）プルプル

この日を堺にスズキはサチを意識し始めた。

血盟騎士団団長室にて。

「????」団長。こちらの書類終わりました」

ヒースクリフ「・・・ありがとうアスナ君・・・君は本当に優秀な人間だ・・・」ゲッソリ

アスナ「・・・あの団長・・・最近少し痩せましたか・・・？」
ヒースクリフ「ははは・・・何をいってるんだいアスナ君？このゲームではプレイヤーの体型が変わることなんてありえないのだよ・・・？」ゲッソリ

アスナ「そ・・・そうですね・・・もし何かおきに召さないことでもあれば私に申してください」

ヒースクリフ「ありがとう。君は本当に優しい人だ・・・そうだ。少し早いが休暇を与えよう。日付は12月24日でもいいかな？」

アスナ「え・・・？わ・・・わかりました。12月24日ですね・・・ありがとうございます。・・・ではこれにて失礼します」

カチャ

アスナ（団長ホント大丈夫かしら・・・12月24日か・・・
あ！そうだわ！）

キリト「・・・」モジモジ

月夜の黒猫団からおよそ2ヵ月後。
俺達は今ディアル達『蒼聖の盾』の本拠地にて滞在させてもらっている。
そして今俺は数ヵ月後に行われるであろうクリスマスイブのイベントにアスナを誘おうか悩んでいる。

キリト（まあ本当はクリスマスをアスナと過ごしたいって言う俺の

安易な気持ちからなんだが……はぁ……。やっぱりやめておこう。断られるのがオチだし……」

ピロン

キリト「!?!アスナから……?」

『ねえキリト君。私団長にクリスマススイブの日に休暇貰ったの!だからその日一緒に出かけない?Asunaより』

キリト「!?!……やったあああああああああ!?!」ピヨン
ピヨン

ディアベル「キ・・・キリト君は一体どうしたのかな・・・？」
スズキ「さ・・・さあ・・・よほど嬉しいことでもあったのか・・・？」

ピロン

アスナ（！やった♪OKだったわ！久しぶりにキリト君とおでかけ
♪ふふ・・・楽しみ♪）スキップスキップランラン

ノーチラス（副団長が笑顔でスキップしてる・・・！？）アセア
セ

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~27766

ソードアート・オンライン～炎の双剣～
2022年11月21日 15時36分発行